2020 年横浜ナザレン教会聖霊降臨節第五主日礼拝
「主の喜びに担われて」ルカ福音書 15:1～7

【聖書】

ルカによる福音書 15:1 徴税人や罪人が皆、話しを聞こうとしてイエスに近寄ってきた。2 すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。3 そこで、イエスは次のたとえを話された。4「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで探し回らないだろうか。5そして、見つけたら喜んでその羊を担（かつ）いで、6家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。7言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」

1　連れ帰る羊飼いの譬え

私達は、礼拝でルカによる福音書を順番に追ってきて、第15章までやってきました。今日は有名な「迷える羊を連れ帰る羊飼い」の譬え話です。のっけから私ごとで恐縮ですが、私がイエス・キリストに興味をもったのはこの譬え話がきっかけでした。この話しを初めて聞いた時、「九十九匹の羊よりも迷える一匹を探し求める羊飼いのような優しい神さまがいるんだ」と感心し、「迷って連れ帰られる羊こそこの私だ」と思った驚きを今でも鮮やかに覚えています。この話しは、誰にもよく分かる話しであり、難しい言葉はありません。しかし、それまで教会に一度も行ったこともなく、却って毛嫌いしていた私にさえも深く触れてくれたように、心に染みいる物語です。行くべき道を見失う人間の愚かさとそれを連れ帰る神の愛、キリスト・イエスの十字架と復活の本質が描かれているからです。この礼拝には、まだ洗礼を受けていない方々もいれば、教会生活を初めて60年という方もいて様々です。ですが、この迷える者を連れ帰ってくださる主イエスを必要としない人は一人もいません。今日は、私達を探し求め神の身許へと連れ帰って下さる羊飼い、主イエス・キリストの姿の中にあるものを共に見つめていきたいと思います。

2　天を覗き見る

二十世紀最大の神学者カール・バルトの盟友とも言われた人に、牧師であり神学者でもあるトゥルナイゼンという方がいます。日本ではバルトほど知られていませんが、優れた牧会者であり神学者で、バルトと共に20世紀の初頭から説教改革運動を起こし、ナチス・ドイツと教会の戦いを支えた方です。その

トゥルナイゼン牧師がこの聖書箇所について、「**開かれた天**」と題して説教をしているのですが、その中で次のように語っています。「**これはまことにまれな聖書の言葉です。ここで私達は、天を覗き見ることが許されるようになります。しかも、そこで聴くのは、その天で、思いがけなくも、私達に関心が注がれているという事です。この地上に生きている私達のために、天で心を煩わす方がおられる。しかも、“私達を一まとめにして”というのではなくて、私達一人一人に心が向けられているのです**」。譬え話を通じて、主イエスは、実に天が開けた、そして私達がその天をのぞき見したかのように天の様子を知る事を許してくださっている。では、のぞき見た天はどんな様子かというと、思いがけなく、誰あろうこの「私」が話題となっている！多くの人々の中の一人として、one of them として話題になっているというのではありません。天には、この私自身に心を集中し心を悩ませてくださる神がおられ、その神に仕える御使いたちもいる、その様子がこの聖書テキストから見えてくる、ここに天の様子が見えた…とトゥルナイゼン牧師は語ります。

この世を生きる私達は、お互いに、他人が自分のことをどう思ってくれているかという事を随分と気にするものです。かつての私はそうでしたが、場合によっては他人からの評価が全てになってしまう…という事もあります。だから、「誰々さんが、あなたのことをこう言っていた」等と実に無責任な言葉に、表面上は無関心を装っていても、心の中ではピリピリします。そうまでではなくとも、周囲の自分に対する評価に対して完全に無関心でいられる人、完全に自由でいられる人はいません。しかし、その一方で、神が、この自分をどんなに深く御心にかけていてくださるかについては、呑気なほどに何も考えていません信仰の最初からそう。私達が信仰に入った時、「これからは、神が自分に心をかけてくださる」と考えたでしょうか。いえ、無意識の内に「これから私が神に心をかけるようになるのだ」と思っていたのではないでしょうか。だから、「信仰を持ちたくなくなったら、神のことなど考えたくなくなったら、それもできる」さえ考える心が私達の中にはあるのだと思います。

3 「小さな羊が」

さて、今日の譬え話、99匹の羊を置いて一匹の迷える羊を探しに行く羊飼いの譬え話は、とてもよく知られている物語です。「子ども賛美歌」という教会学校の礼拝で使われる讃美歌集にも収められている、皆さんも知っている有名な歌があります。

「**1 小さい羊が　家を離れ、ある日遠くに遊びに行き、花咲く野原の面白さに　帰る道さえ　忘れました。**

2.けれどもやがて夜になると、あたりは暗く、寂しくなり、うちが恋しく、羊は今、声も悲しく、泣いています。

3.情けの深い羊飼いは、この子羊の　後を尋ね、遠くの山々、谷そこまで、迷子の羊を探しました。
4.とうとう優しい羊飼いは、迷子の羊を　見つけました。抱かれて帰る　この羊は、喜ばしさに踊りました。」

羊の群れは、羊飼いに導かれ食物となる草のある所、水を飲む場所に行く事ができます。また天敵である狼や野犬から守ってくれるのも羊飼い。羊飼いがいなくては生きていけないのが羊です。だけれども、「羊飼いがいないと生きていけない自分である」と気づかない羊は、束縛を嫌ってでしょうか、自分の楽しみを追いかけてでしょうか、羊飼いのもとをさまよい出ていく。優しい羊飼いは、この一匹の愚かな羊を追いかけ、山や谷を巡り歩きながら探し歩き、助けにやってきてくださる。羊の愚かさ、迷子になっての心細さ、孤独、そして迎えに来てくれる羊飼いを見つけた時の喜びが描かれた歌です。信仰者の心情が身近な言葉で歌われた賛美歌であり、私達も愛してきた賛美歌です。

が、しかし、みなさん、ここで今一度、この歌と、それから主イエスがここで語っておられる譬え話、この主の言葉を比べてみていただきたいと思います。聖書のテキストを今一度追ってください。第15章の4節から7節が譬え話です。小さい羊の賛美歌と聖書の主イエスの言葉、この二つの間には、ズレ、異なる響きがある事にお気づきではないでしょうか。私達はその事をしっかりと見ないといけません。これらの歌は愚かにも迷いでた自分たちの姿を語り、それを探し求めて下さる主イエスの愛を語ります。その通りです。そのとおりですが、皆さん、今一度テキストをご覧ください。4節から7節の主イエスの譬え話の中には、賛美歌で歌われている一匹の羊の迷いもその心のうちも少しも語られてはいないのです。では何が語られているのでしょうか。

4　天の喜び

羊飼いの喜びが語られています。さまよいでた羊を見つけた羊飼いの大きな喜び、近所の人を呼び集めるほどの羊飼いの溢れる喜びが語られています。7節の言葉を使えば、「天の喜び」です。その喜びは見つけられた羊の喜びを大きく優しく包む喜びであったでしょう。主イエスがこの譬え話から私達一人一人に伝えたいと願っておられるのは、まさにこの天の喜びなのだと思います。

その喜びはどういうものなのか？トゥルナイゼン牧師は先ほどの説教の中で、次のようにも述べています。「**神がここで御心を注いで下さり、じっと見つめていてくださるのは、世界の大きな出来事ではない、ただ、私の心の中にひっそりと隠されて起こっている出来事である。**」と。イエス・キリストを通じて神を信じるという事は、一人の人の魂の内部で起こることです。しかし、そこにこそ神がじっと目を留め、心から喜んでくださる。誰にも見えないようなところで、私が

心の中だけで流す涙に、神は目を留めて下さる。誰も理解してくれないような私の苦しみに、神の眼差しが注がれる。天を覗き見するという事は、そういう事に気づかされる事だとトゥルナイゼン牧師は語ります。イエス・キリストの父なる御神は、私達の魂に深い関心を寄せておられ、強い繋がりを持とうとしてくださるお方です。だから、私の心の中の出来事は、決して小さいものではありません。天地万物を造られた神が大きい関心を注いでくださる出来事なのです。そして、この羊飼いに見出されるという私の出来事を喜んでくださる神の喜びは、私達が自分自身について喜ぶ喜びよりも深く大きく確かなものです。神の喜びは、私達の喜びに先立ち、喜んで私達を救うために神は天から地へと降ってくださったのです。そして、神は喜んで私達の信仰の戦いを見つめてくださっています。神の喜びは深く大きく確かです。そうでなければ、私達の信仰が保たれるという事はありえません。私達一人一人が深く愛してくださる主イエスと出会うことを、神が大いに喜んでくださる、その事を忘れた時、私達の喜びもまた儚くなります。

5　この地上で

ここに覗き見ることが許されている天の喜びは、天において起こっている事ではありません。この譬え話のきっかけは、徴税人や罪人達と一緒に主イエスが食事をされていたから。徴税人や罪人、ファリサイ派や律法学者から言わせれば神の掟に忠実でない人々です。言い換えると、「神が自分を顧みてくださる」とあてにはできない人々。一方、ファリサイ派や律法学者は、神の掟に忠実に生きてきましたから、「正しく生きる自分たちにこそ神の御心が向けられている」という自信をもっていました。その自信から、徴税人や罪人を退けていたのです。ある時、自分たちが心惹かれているイエスという方が来られた、しかし、なんと、こともあろうに彼は自分たちが退け遠ざけている者達、当然、神が退けていると信じていた徴税人や罪人と一緒に食事をしている！ファリサイ派達の中に**「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」**という不平が起こります。

しかし、実際には、主イエスの一行はエルサレムへの旅の途中ですから、主がご自分で食卓をととのえ、人々を招いたわけではありません。徴税人や罪人が食卓を作り、そこに主イエスを客として招いていたのです。「この人は罪人達に迎えられて食事まで一緒にしている」と言った方が正確であったでしょう。しかし、このファリサイ派や律法学者達のつぶやきは、そうではありません。「主イエスが罪人達を迎えて食事まで一緒にしている」と言っています。ファリサイ派や律法学者達は、主イエスと徴税人や罪人達が囲む食卓で実際に起こっている事、徴税人や罪人に招かれる事によって、主イエスの方が彼らをもてなしておられるという事を見抜いているのです。主イエスを迎えるとい

う事は、主イエスに迎えられもてなして頂くという事、交わりの中心はイエス・キリストです。

6　天にある

　その主が徴税人や罪人を遠ざけるファリサイ派や律法学者達に問いかけるのです。「**あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいるとする**」、つまり、「あなたがたの中に羊飼いがいるとするとする」と言われたとき、驚いた人がいたに違いありません。当時の社会通念として、羊飼いのつとめは卑しいものとされており、値打ちの低い卑しい仕事だと思われていたようです。だから、律法学者やファリサイ派の人々の中に、羊飼いはいなかったと思われます。「自分たちは選ばれた聖い存在、その自分たちを羊飼いに譬えるとは、なにごとか！」たとえ仮に…の話しだとしても、プライドを傷つけられたかもしれません。しかし、羊飼いがいなければ彼らは羊の肉を食べる事もできません。そのように職業によって卑しい者と人を差別する人間の心の闇を鋭く指摘するように「**あなたがたの中に羊飼いがいるとする**」と主は言われました。そして、「**その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで探し回らないだろうか。そして、見つけたら喜んでその羊を担（かつ）いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。**」と続けます。

　「徴税人、罪人と呼びあなた方が退けているこの人々は、この一匹の羊に似ていることをどうして忘れたのか。あなたがたがこの人たちを愛するよりも先に、あなたがたがこの人たちを愛するより深く、神は、この人たちの羊飼いでいてくださるのだ。そして、この私が、その神の羊を飼う御心を身に負ってここにきているのではないか。」主はそう言われます。そうして実は、神の愛からさまよいでている迷えるファリサイ派や律法学者達を連れ帰ろうとされているのです。

　それは、ファリサイ派や律法学者達だけではありません。私達もそうです。「あなたたちを探し求め、大いなる喜びをもって父なる神の身許に連れ帰る為に、私は地上に来た。」この主イエスの言葉を聞いてこそ私達は、天にある神の喜びを、この地上で味わうことができるようになります。天にある喜びが、喜びを失ったままに地上で生きている私達の傍らにいてくださるから。地上にある天の喜び、それは迷った一匹を見つけ、喜んでそれを自分の肩に乗せる羊飼いの姿。主イエスは、神の喜びをもって私達を担って下さいます。

7　天の喜びに支えられる

先週の礼拝の後、日野墓苑でM．F兄の納骨のために墓前礼拝を捧げました。そのときにある兄弟のF兄への言葉を紹介しました。もう半年前になりますが、昨年のクリスマス礼拝と祝会が終わってから、入院しているF兄の病床へと数人の方々と駆けつけ、控え目にキャロリングしました。帰り際、F兄と共に教会生活を送って来られたある兄弟がF兄に力強く言いました。「Fさん、イエス・キリストが共におられます、あなたのこのベットの下におられて、あなたを支えていてくれています」と。主イエスは、このベットの下から、病との孤独な戦いに呻き苦しむF兄を支えていてくださる、本当にそうだなぁと思いましたので、この言葉をF兄の納骨式で紹介しました。

そうして始まった先週一週間、この聖書テキストからの説教を準備している時に思いました。主イエスが私達を、ふらふらと揺れ動き迷い出しそうな私達一人一人を担ぎあげ支えてくださる、その主イエスこそこの地上に来てくださった天の喜び。迷える羊に出会って誰よりも喜んだのは羊飼いその人、愛する羊に巡り会えた、そして父なる神のもとに一緒に帰っていく事ができる、なんと嬉しいことか！主はそのような天の喜びに溢れ私達を担い支え切ってくださいます。主イエス・キリストに、天の喜びに担われているのが、F兄でしたし、ここに集められた私達一人一人です。

私達は信仰を与えられたからと言って、喜びだけで生き続けるという事はありません。一喜一憂し揺れ動きます。朝に信仰の喜びが溢れていても、夕方にはおろおろと心配しているという具合です。そんな一喜一憂する自分の心に振り回されずに済むのは、天にある喜びに支えられているからです。主イエスの喜びは、決して揺らぐ事はないからです。揺るぎなき天の喜び、主イエスの喜びの中で、自分は神に愛され求められているという存在だと知る、これこそ私達の確信であり喜びです。だから、この天の喜びに私達が担われている事を忘れた時、私達の喜びも儚く消えてしまいます。そして、いつしか自分の信仰を誇るようになりファリサイ派や律法学者達のように人を審き排斥するようになるのです。しかし、そうして迷いでた私達をも主イエスに招かれ、「あなたは私の喜びに担われている者だ」という事を思い起こさせられます。私達の信仰は、主イエスの喜びに貫かれ担われているのです。だから平安が与えられます。

8　悔い改め

主に、天の喜びに担われて父なる神の身許へ帰る事が＜悔い改め＞であると聖書は語ります。ですから、7節の「**悔い改める一人の罪人**」を「立ち帰る一人の罪人」と訳す人もいます。私もかつてはその方がいいと思っていました。しかし、最近考えが変わって、やはり＜悔い改め＞と訳す方がよいと思うようになっています。何故かというと、このたとえで言われている事は、ただのほほ

んと帰ってくるというだけではないからです。神の身許に帰ってくる、そこには、自己中心的な生き方を悔いる気持ち、神にお詫びをする気持ちがあるからです。「神様、本当にごめんなさい」と言わずにはおれない悔いる心があるのです。それが主イエスに担われて帰る時の私達の気持ちです。自分を担う主イエスの鼓動を聴くほどに、私達は主と身近に触れ合います。そこで私達は、自分を担う主の苦しみ、痛み、私達を愛するがゆえの苦しみ・痛みを知るのです。主イエスのお話しは、決して安易な恵みを語っているのではありません。主の十字架の愛にも、主の苦しみにも担われ、連れ帰られる私達です。

この譬え話に先立って14章25節以下では、「**父、母、妻、子、兄弟、姉妹、更には自分の命までも捨てて、私のもとへ来なさい**」という主の言葉があったことを忘れてはなりません。家族に執着し自分の命にもこだわりきっている私達が、そのこだわりを捨てて神の所へ帰ってくるというのは厳しいことです。痛みを覚える事です。しかし、その悔い改めの痛みもまた、天にある喜びの確かさをもってこそ贖われます。変な言い方かもしれませんが、天にある大きな確かな喜びに担われるからこそ、私達は安心して悲しみの涙を流すことができます。安心して苦しむ事ができます。そうして私達の命は、この世の苦しみや痛みによって決して滅びる事がないと知らされます。それが主イエスの喜びに担われて生きる羊とされた私達であり、教会です。

これから迎える一週間も、横浜ナザレン教会に連なるお一人お一人が、神の喜びに担われ神の喜びに新しく生き続け、それぞれの地で、地の塩・世の光となることができますように、切に祈る次第です。